

2026.4.7

第122回 有田国際陶磁展

産業陶磁器部門 審査評

審査長 井戸 真伸

まずは本年も当コンペティションが無事に開催され、この日を迎えられたことを大変嬉しく思います。そして、微力ながらやきもの産業に関わり、応援させていただけることにあらためて感謝申し上げます。

本年の産業陶磁器部門の応募点数は昨年に比較して微減となりましたが、この数年で見ると概ね横這いに推移していると思われます。願わくはもちろん応募がさらに増え、盛り上がってほしいところではありますが、やきものに関わらず地場産業全体が下降気味であることを鑑みれば、相対的には増えていると捉えることもできるかもしれません。いずれにしても継続は力ですから、今後もやきもの産業に関わる産地のみなさまの力を結集して、続けていかれることを願っております。

さて、本年の審査は能作克治氏、原田祐馬氏、井戸の三名で行われました。それぞれ専門が異なりながらも、クリエイティブ分野で活動する三者が意見を交わし、大変充実した審査になったと思います。お二方に、この場を借りて感謝申し上げます。

審査は例年通り先ずは投票から始めましたが、そのあとはすべて互いの意見をぶつけ合いながら、話し合いによって賞を決定していきました。その結果、第一位となる経済産業大臣賞には香蘭社さんによる「kiriko ワインカップ」に決定いたしました。本作はその名の通り切り子のような意匠を全体に施した、とても繊細で完成度の高いプロダクトです。これまでも陶磁器によるワインカップは度々市場に登場してきましたが、本作は従来商品と比べても新鮮さを持ち、薄く軽く造られたカップ部や、フリルスカートのようなステム部の造形は大変優雅で魅力的です。また、おそらくCADによるものと思われる設計や、一見無釉かと思わせるような端正な釉薬の使い方、難しい焼成も完璧で、経済産業大臣賞にふさわしい見事な作品だと思いました。

続く佐賀県知事賞には、やま平窯さんによる「六角高台小鉢」を選出させていただきました。本作もCADによる設計ですが、一番感心したことは直線の造形です。やきものはとかく直線が苦手な曲がりがちですが、その変形予測を見事にこなし、いい意味でやきものらしくない新鮮な造形を表現してくれています。また、ビスク地に施された金銀彩は主張しすぎることなく、美しい魅力をつくりあげていました。唯一惜しく思ったのは本体と蓋の嵌合の甘さです。意図的なものだったかはわかりかねますが、せつかくCAD設計をしておられるのですから、もう少し攻めた嵌合を狙った方が良かったのではないかと思います。それをもこなしていれば、第一位を競っていたかもしれません。

上記二つの賞に続く受賞作の中にも甲乙つけがたいものがたくさんあり、総じて充実した作品群となっております。前回も申し上げたことではありますが、コンペティションは「挑戦と提案」であり、商品としての魅力とともに、世の中に何を見せて

くれるか？という期待ですから、今後とも大いに楽しみにしております。

さて、以下はやや余談ではありますが、先日、日本の企業と大学が世界初の木製人工衛星を開発し、NASA/JAXAの審査に合格して宇宙へ放たれたというニュースを見ました。衛星が大気圏再突入時に燃えて無くなることで、地球環境や通信などに対して悪影響を与えさせないことを主な目的としているそうです。驚くのはその組み立てで、日本の伝統的な蟻継ぎの一つ「留形隠し蟻組継ぎ」を用い、組まれた箇所は外からは一切見えないというこだわりようです。しかも接着剤は宇宙環境化で精密部品に悪影響を与える可能性があることから一切使われておらず、組み木のみで造られているとのこと。この寸分変わらず精緻に組む技術は機械成形ではなく、職人の手技のみが可能であって、AI 全盛の時代であっても、人間の手や知恵でしかできないことがまだまだたくさんあることを教えてください。それは陶磁器をはじめとした地場産業全体にも大いなる勇気を与えてくれるものではないでしょうか。私たちは今まさに AI 時代への過渡期にいますが、その中であつても長い歴史を持った陶磁器に何ができるか、人の知恵と技で何ができるかを試されていると思いますし、それを示せると思います。そういったことを確信できる素晴らしい作品をこれからも期待しております。